

顯正破邪
天理教根本實義

014441-000-8

特18-929

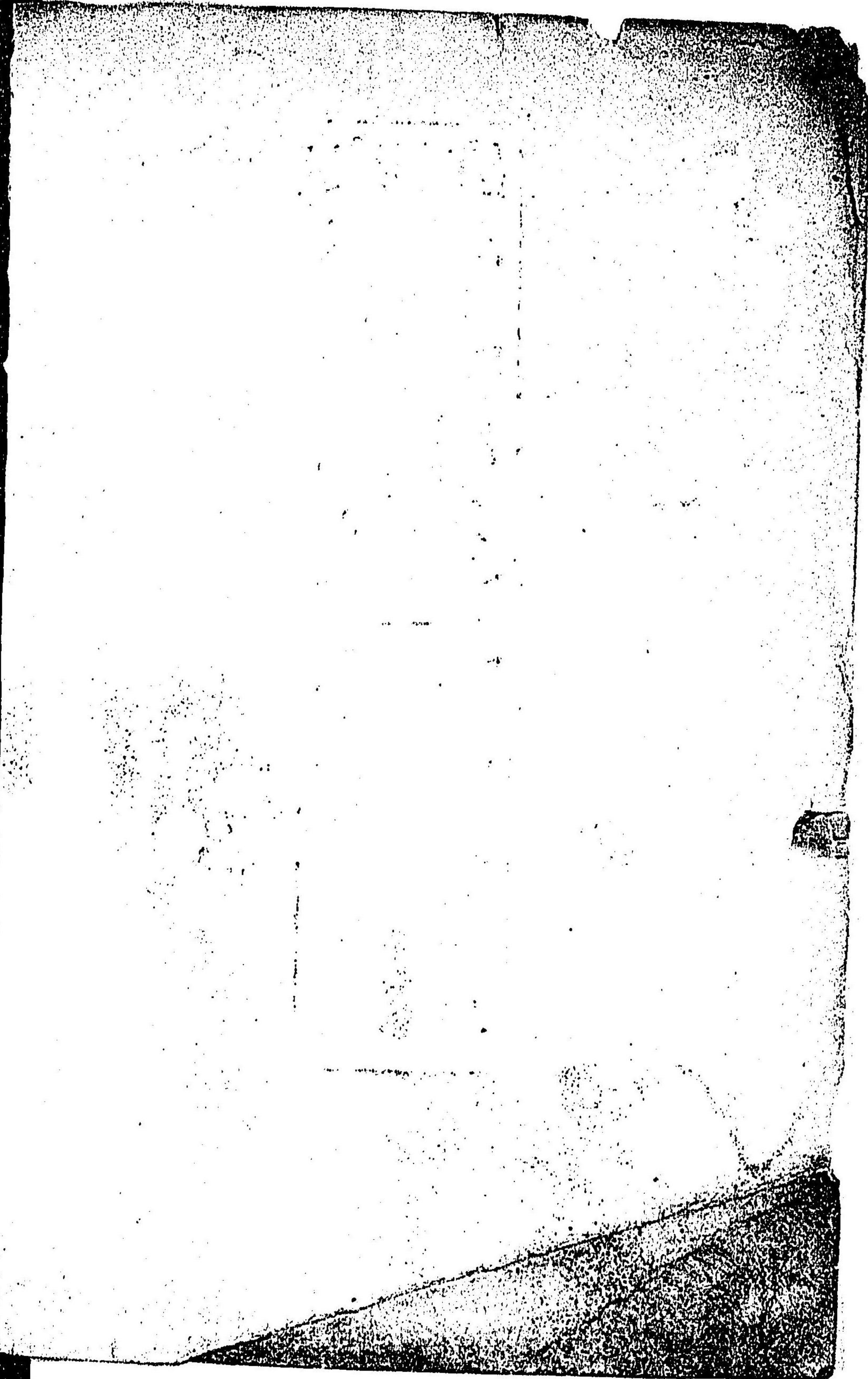
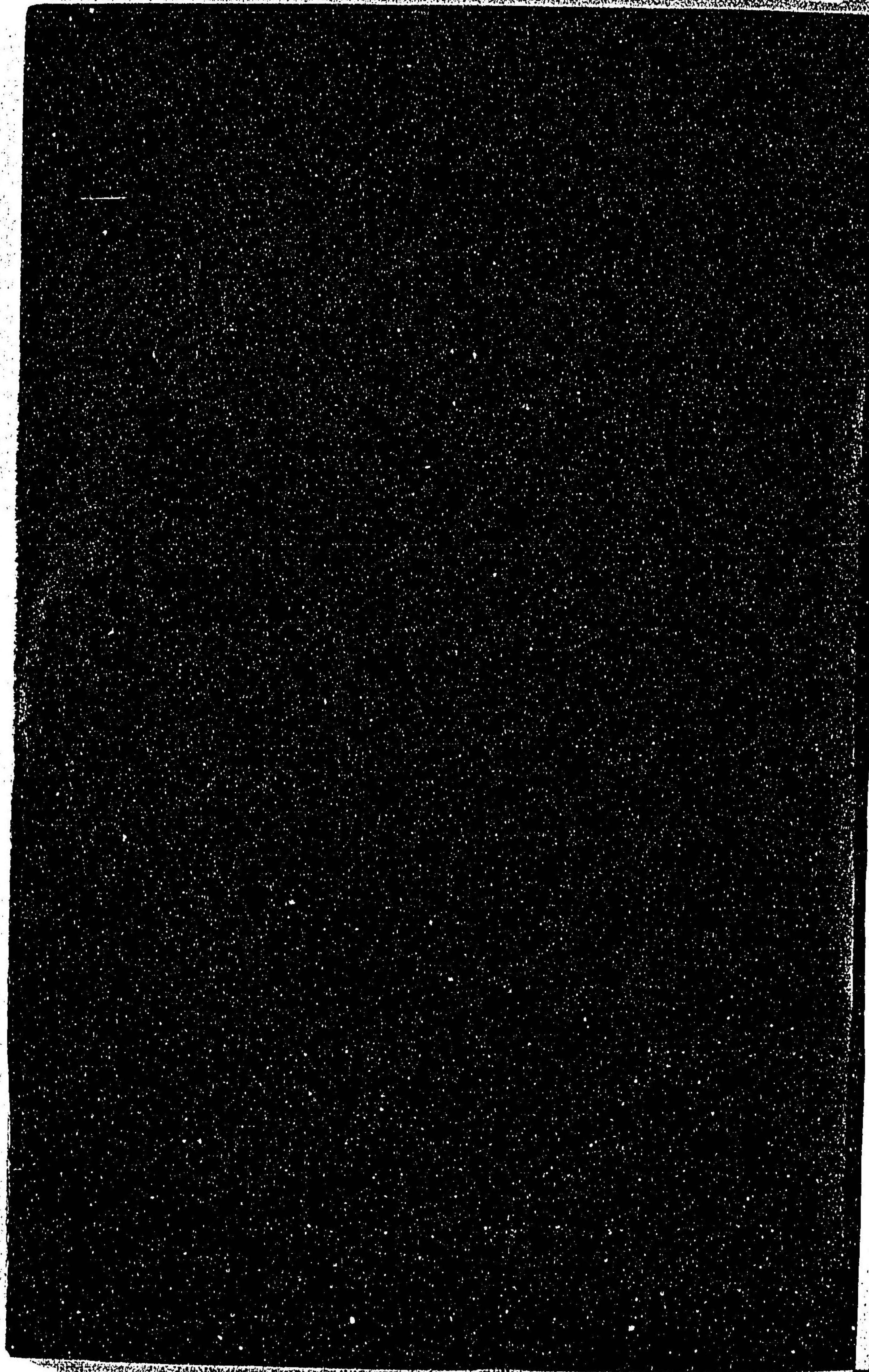
天理教根本實義(破邪顯正)

山中 重太郎/著

M33

ABB-0819





自序

信仰と智識とは如何なる關係と有せるものなるや、理論と感情とは如何なる關係と有せるものなるや、神と人とは如何なる關係と有せるものなるや、宗教とは如何なるものなるや、是れ實に千古の一大問題也。哲學者は哲學の本領によりて之に應じ、科學者は科學の本領によりて之に答へ、神學者は神學の本領によりて之を辨じ、普通人は常識によりて之と解く、各々皆な全面をのぞむに一部面を以てするのみ也。此の如くにして焉んやよく此の大問題と解釋するを得んや、うの多くが割據的斷定と失望的懷疑とを以て了る元より宜なり、予は哲學者にあらず科學者にあらず神學者にあらず、予は實に人間なり、予は實に我天理教の信者の一人なり、無學無識無能無力、何の見るべきの品もなし、元より此の大問題に應答するの器にあらず、然れども聊か我が信する處のものを以て、信者たるの面目を世に公にせんと思ふ、是れ實に予の狂性をさめる能はざるの發憤に出るなり、ア、人間としての予の此の一文幸に天啓の光に接するを得ば誠に無上の幸なり、希くは大方の諸士、予の感涙を憐んで此の狂態と恕し玉はんことを祈る、

明治三十三年九月二十二日

不孝兒

山中重太郎識

◎我が祈願

天にまします自由用力大自在の大神嗚呼大神希くは憐れなる我を道の光に依りて救ひ玉へ誠の道によりて助け玉へ大神に救はれ大神に助けらるゝにあらざれば我は不信仰の同胞を天の理の光に導く能はざるなり希くは大神信仰は大神の無上の賜なることを以て我が靈を助け救ひ玉へ信仰なきものは如何に位ありとも如何に財ありとも如何に才ありとも如何に學ありとも大神の子にあらざることを以て我が靈を救ひ玉へ助け玉へ

著者 重太郎泣記

天理教根本實義

文學士 山中重太郎著

第一章

真正の宗教は人の作つたものでなふて、神様の御作りなされたものである、人は唯宗教の教理を世界に布き傳へることの出来るものなれども宗教の根本實義は人の支配し得るものでない。

今更云ふ迄もなく宗教の生命は信仰である、信仰は神様に頼る力である、信仰なしに神様に頼らふと思ふのは梯子なしに二階に上らふとすのと同じことである。其の信仰の種子を始めて世に弘めかけたる人は教祖である。

◎我が祈願

天にまします自由用力大自在の大神嗚呼大神希くは憐れなる我を道の光に依りて救ひ玉へ誠の道によりて助け玉へ大神に救はれ大神に助けらるゝにあらざれば我は不信仰の同胞を天の理の光に導く能はざるなり希くは大神信仰は大神の無上の賜なることを以て我が靈を助け救ひ玉へ信仰なきものは如何に位ありとも如何に財ありとも如何に才ありとも如何に學ありとも大神の子にあらざることこの理を以て我が靈を救ひ玉へ助け玉へ

著者 重太郎泣記

天理教根本實義

文學士 山中重太郎著

第一章

眞正の宗教は人の作つたものでなふて、神様の御作りなされたものである、人は唯宗教の教理を世界に布き傳へることの出来るものなれども宗教の根本實義は人の支配し得るものでない。

今更云ふ迄もなく宗教の生命は信仰である、信仰は神様に頼る力である、信仰なしに神様に頼らふと思ふのは梯子なしに二階に上らふとするのと同じことである。其の信仰の種子を始めて世に弘めかけた人は教祖であ

る、教祖は天と人とを一致せしむる力量ある人である、
教祖は神様の御使である、教祖は神様の御心を此の世
に述べはじめた人である、教祖は姿は人であるけれど
も實は神様の化身であるのである。
然れば教祖に不思議の多いのも、神秘の多いのも、靈
妙の多いのも元より當然のことである、預言の如き、
奇蹟の如き、元より教祖の本分であるのである。
何れの世にても宗教の起源は靈妙不思議なものにな
い、偶然と云ふか、天然と云ふか、云ふにも云へぬ妙
なるものである、俗人は以て、まつねつきと云ひ、たわ
げと云ひ、ばかものと云ひ、狂人と云ふのが常である、

其れも其の筈、教祖はいつの世でも人々の思ひもよら
ぬ言葉を發し行を現らはし、云はゞ變幻幽奧なことを
ば示さるゝ。

現に四億万の信者を有する耶蘇教のクリストは山子師
と云はれ罪人と指さされた、六億の信者を有する佛教
の釋迦は乱暴ものと罵られ外道と稱へられた、近くは
西洋の宗教を改革したルーテルの如き、日本佛教界の
偉人日蓮上人の如き、皆を外道悪魔と嘲弄された、或
は槍先にかゝつて殺され或は何十年の千辛万苦、慈悲
の涙に身を捧げ、或は水火の痛慘の中に救世の聲を續
けて作るゝなど、すべての教祖の難義は決而容易のも

のでない、若し其の當時に生まれ出て各教祖の有様を見たらば、云ふに云へぬ惨ましいことばかりであつたであるよ。

天理教の御教祖中山みき子が、天理教を此の世界に弘むるために如何ばかりの艱難辛苦を遊ばされたか、如何ばかりの惨憺たる生涯を御辿りあそばされたか、其れは總ての信者のよく知つて居る處である、其の御有様の御いたわしいことは各宗教の開祖にまさることも及ばぬをと云ふことは決してない、併し御教祖御自身は其の苦勞を苦勞と御感あそばされたやら或は大慈大愛の御心には幽奥の大樂を御供へあそばされしやら、

其は衆生の推し得ぬことであると思ふ。

明治二十一年四月十日東京府の認可を得て下谷區北いなり町四十二番地に天理教會本部を開設する以前の時代の御教祖は如何に御くらしなされたか唯天意を体して助け救の福音をのべ玉ひしのみ、信者の様子は如何なものであつたか唯隨喜隨心天の御恵に沐みするを歡びしのみ是はすべての信者のよく知つて居る處である、是を一言に云へば御教祖は神様の御代身、信者は神様の御子と云ふが適當なものであつたのである、要するにすべての他の宗教の起源にあつた弱点天真の優所は天理教の起源にもあつたであるよ、これは天然自然の

しからしむる處である、ソレを今の當時にくりかへして天理教攻撃の材料にするものなごあらば實に大變な心得違である、元々宗教の起源の性質を知らずに皮相の解釋と斷定を下すのは如何にも不便な心根である。

第二章

大和國山邊郡丹波市三島の天理教會本部のある處は我天理教の指定する靈地である神屋敷である、信徒の所謂御地場である
何故に靈地で神屋敷で御地場であるか云ふことは人間の方で十分に解釋することの出来ることでない、唯々御教祖の御思召に順いまつるより外はない、我ら

は斯る神聖なる大問題を智識的に解釋し議定することはせぬ、唯々信仰的に讚美し斷定する、これ決して不當のことでないと思ふ。

そもく宗教云ふものは、總ての學問や書物や理屈で組み立てられたものでない、宗教の起源と組織とは神秘である不思議である靈妙である其れに向つてなまなか學理的評論を加ふるは全体不當のことであるのである。

云ふまでもなく信仰と智識との戦争は随分久しいもので殆んど人類創始以來の戦争問題である而して未だ決着せぬ、決着はせぬが宗教の本質は依然としてあつて、

八
神秘は相變らず神秘で、不思議も靈妙も矢張元の如く昔も今も同じことである唯々少々代つたのは宗教の本質でなふて宗教の教理の裝飾物のみである。一体宗教は理論によつて組み立てたものでなく又た理論によつて破壊さるゝものでもない、云はゞ幻にして幽霊にして奥なる處にその本據を置くのが宗教である故に何れの哲理も科學も或る超自然以上へはその力の届かぬものである、奇蹟の如き預言の如き皆を悉く超自然の一である、超自然的制裁力を本源とする宗教に向つて平凡の理論を試みるは云はゞ事物の大小本末の關係を知らぬ所爲である。

人類開始の靈地の次第は如何なるものであるか、天理王命と云ふものは何であるかと云ふことを尋ぬるものが多い、そも是は何のために尋ぬるのであるか、是のここを尋ぬるには少くとも宗教と云ふものゝ本性を知らねばならぬ、宗教の本性は御教祖の御旨に従ふて少しも疑はぬと云ふ一点に存するのである。

人類の創始を知らふと思ふならば御道の教に従ふがよい、天理王命を信じよと思ふならば御道の教に順ふがよい。

天理教を攻撃し批難する人は、記紀二典によつて彼是れ云ふけれどもソレハ大を誤である、成程記紀二典は

日本の神典とは云ひ乍ら其も人の手で作つたものである、始終限りなき此の時間、際涯はてもなき此の空間、此の宇宙此の世界に付て無量の説明と断定を與ふるものでない、云はゞ或る一つの假定を歴史的に日本國民に與へたものである、是れを以て天理教の教理に對比せらるゝのは少しく迷惑する處である、何となれば天理教は在天の大神の御聲を天下四海に傳へる教であつて大靈力を有するものである、是を大にしては世界を救ひ是を小にしては一身一家を助くるのが天理教の本願である、然れば天理教の教職及び信徒は悉く國家の人として國民であるけれども宗教の子として天

の親神様の子である本の神様眞の神様の子である、茲をよく知つてもらはねばならぬ、我らの此の天理教は書物や學理の中から出來たものではない、神様の御心に順ふて天然自然に發生し成育したものであると云ふことを知つて頂かねばならぬ古哲の言に「人は窮せざれば眞理に至る能はず」と云ふことがある一度此の教のために窮して後ち道を云爲するならばこもかく門外漢として試的に道の批難は如何にも殘念である。

第三章

天理教の創世説は無法無茶であること云ふものがある、ソノ云ふ處の要領をまくに天理教の創世説は哲理にも

科學にも一般の道理にも一致する處がない頗る不道理
極まる不都合のものもあると云ふことである、これは隨
分譯の分らぬ云ひ分である。

哲理や科學や一般の道理はそも誰れの作つたものであ
るか、云ふまでもなく人間のこしらへたものでないか
人間がその本來の思想感情の力と實驗とより發明した
ものでないか云はゞ限りのある心と限りのある實驗と
より割り出したものである、斯様なものを以て限りの
ない宗教上の創世説を批評するのは無理である。

元より人間と云ふものも神様のこしらへなされたもの
なれば人間の心の力と行の力とで得たる道理で一つの

役には立つけれども、ソレニハ限がある、ソレニハ際
がある、其の力を以て幽冥不思議の領分を計ることは
出来ぬ、昔の昔のその又た昔の昔の時代を計ることは
出来ぬ、後の世の後の世のその又た後の世の時代を計
ることは出来ぬ、出来ぬことを強いて仕よふとするの
は無法である、無法と知らずに、其法をしようとする
のは無茶である、共に云ふにも足らぬ憐れなものであ
る。

試に世界中のすべての宗教の創世記を見るがよい、何
れのものでも哲理や科學によく一致したものが何處に
あるか。

我らは唯信ずる古聖の所謂「人類は尤も單純なる眞理と尤も後に知認するものなり」このことを信する「正義と正罰とは宗教の要本なり」このことを信する、神様の信仰は唯心よる難有いと思へばソレでよいと信ずる。

第四章

在來日本國民の宗教心は雜駁なものである、從ふて神の名も佛の名も随分澤山あるこれは必竟、本の親様實の神様の世にあらはれなんだ證據である、今や「コトノ神様(眞正の大神)が表にあらはれて自由自在に御働ま遊ばすにのぞんで古物の神佛を彼是云ふのは我らの好

まぬ處である、況や書物に載せてあるいろくさまざまの神名佛名と我らの云ふ處の神様の名前と違ふが違ふまいが、ソレハ少しも拘わぬ何となれば我らは唯々天啓に順ふものであつて古い記録や新しひ理詰に順ふものでない、天啓に順ふのを宗教家の本分と云ふことを知らずに我らを批難する様なものは丸で宗教を知らぬものである。

且や又た日本の在來の神名の解釋は非常に入り乱したものであつて十人十色のさき方でサツパリ要領の得られぬものである、佛のこともソノ通り横道より横道へこ入つて行く、神名佛名を今頃に出して、我が大神

様の批難の材料にしよふとは随分間違ふたことである。佛教の説く處にも神道の云ふ處にもいろくさまづの妙味もある、けれどもソレは一部局のものであつて要領と統一がない、これらは皆な枝葉に渡つた證である、枝葉の議論で、本のミキを彼是難じよふとするのはあまりに不覺である。有体に云へば天理教には末代不易万古不動の神理があるのであるソレを今くわしく述べよふとすれば一体に宗教心のない日本人や日本政府はつまらぬ誤解や、迫害をする故に精々ひかへて教理の一部を實行表現しつゝ在來神道の範圍内に籠つているのである、それ故心

ならずも俗神道と云はれて居る、けれども心はタシカニ天の心である、まことの大神様の心を我心とする天理教は今日迄の世間並の日本人らの知らぬ處の神聖な本領を有するものである、

第五章

一体日本人は宗教と歴史との關係を知ることが少く、それ故にいろくさまづの誤が生ずるのである。歴史上の書物は人間の事實と思想とを基としたるものであるけれども、宗教上の神典は大神様の默示によるものである。世に神様はあるものなるか、無きものなるかと云ふこ

こは千古の大問題である、神様の御さ、ごしのあるかな
 いかは終天の大問題である、疑ふものはない、と云ふの
 である、信ずるものはある、と云ふのである。
 我らは神様の存在を信ずるものである、我らは神様の
 守護を信ずるものである、我らは神様の命令を奉ずるも
 のである、それ故に慰めや安心や覺悟や勇氣や仁愛や
 誠實やそれらの結構なものを神様より頂戴するのであ
 る、これ實に宗教の恵である。
 立派な宗教の中には愛人的觀念がある愛國的觀念があ
 る、眞理の粹を愛するの觀念がある、かくの如き結構
 なものを信ずる我らは俯仰天地に耻ない決心である、

第六章

されば世間の學理や書物との衝突位は何とも思はぬ、
 思はぬ處でない、最後の神秘にはすべての流れが注ぎ
 込んである、と云ふことを信ずる大聖の言に「眞正の神
 殿は人あり」との深大幽妙の味を感賞するものである。
 信仰の自由と云ふことはいつの世でもの元理である、
 是は單に國家社會などの形体上のことをなふて人間の
 靈魂の上のことである。
 天理教の奉祭主神が、日本の神典古文典に合ふが合ふ
 まい、ソナ、ここは知らぬことである、我らの神典
 は御かぐら歌である、御ふでさきである、我らは天理教

の奇蹟を信じ、預言を信じ、永遠の運命を信ずるものである、我らの信仰は我らの命である、我らの命は神典に基するのである。

日月は一体どんなものであるか、地球は一体どんなものであるか、人間は一体どんなものであるか、神様は一体どんなものであるか。

これらを解釋するに哲理の上よりするか科學の上よりするか、常識の上よりするか宗教の上よりするか。

宗教の上よりするときは唯々御教祖の御旨に従ふより外はない、古哲の遺聲に「神の奥義は深し、神は遺傳と境遇と天性と運命との作用によつて善人をつくる」

と云ふことがある、我らは之をよき参考義と考へる又た聖言に「世にあるものは神なり人なるものは神の信者なり憐むべきは偽信者なり尤も憐むべきは信者の後悖なり」とある意味ある柱杖の力と思ふ。

第七章

人間の靈魂は始は誰の作つたものであるか、遂には如何になつて仕舞ふものであるか、靈魂は獨存するものなるか肉体と共に消亡するものなるか。

此の間に答ふることの出来るものは恐らく世界にあるまい、唯是に答の出来るものは宗教の開祖であるふ、我が天理教の御教祖であるであらふ。

進化が宇宙の大法則であることは分つてある、下より中中より上と段々ものゝ進化することは分つてある、動物の進化の如きはメシカなものである、されば人間がその本(元始)は如何様な下等動物であつたかは面白い研究物である。

面白い問題ではあるが、ソノ實體は容易に分るものではないと思ふ、なぜなれば傳承なく記録なく推理の力の及ばぬ以前は到底人間心力の外である、か様に容易に分らぬものをさらへて何れが真か、何たが偽かを断定するはよほど早計であると思ふ。

古賢の名音に「心靈は道德上の善惡を判別するものを

れども事實上の眞偽を鑑定するものにあらず、故に我靈を救ふ信仰は道德的にして智識的にあらず」こあるこれ宗教論者の尤も注意すべきことである。

第八章

人の身体はとふして組織されてあるものなるか、人体の諸の機關は如何にしてつくられたものであるか。

人体は偶然に出来たものであるか、天が心を以て作つたものであるか。

偶然に出来たものならば、ソノ生活も偶然なるべく、天が心を以て作つたものならばソノ生活に天の心の入つてあるはずである。

我らは人間の身体は天のなさいけの心を以て作られたもの
と信ずる人間の身は天にまします、まことの神様の
自由用力で作らへて貰ふたものと信ずる。

その如何にして作らへられたか、如何にして育てられ
たかは御教祖の御旨に従ふより外はない神様の御守護
が如何に尊崇で如何に結構であるかは少しく冥加を知
るものゝ直ぐ分ることである。

「知と信とは大別あり」と云ふことがある。「罪は私慾
なり、私慾は我より来る」と云ふことがある。「人に依
つて神に仕ふる、これ教理の要なり」と云ふことがあ
る、我らは常にかくの如きことを味ふて大我を見、自

然を見造化の精を見自分のはかなく且つ床しきを思ふ
て居る。

濫雅にして熱誠、淡如として勇猛、平氣にして不退の
君子をつくるは我教の目的たるを思ふて小知小巧に奔
らぬ様戒めて居るのである。

第九章

多くの小さい宗教を一括にして一の大きな宗教を組み
立つることが出来るものとすればすべての多神教を改
め清めて一神教をつくることが出来るである。

凡神教は皮相教で、眞神教は根本教であると思ふ。
万有教は淺近教で、唯神教は深奥教であると思ふ。

是等のものを一寸見るさまには非常に相違するやふに見ゆるけれども、最も大な調和の力を以て観察するさまは、神聖偉大なる天理教の面影の現示する様に思ふ。ア、天理教は総ての宗教を一括し総ての人間を救ひ、総ての國を助け、総ての世の中を洗ひ清めるために天の大神様が御つくりなされたものである。然れば天理教の教義の中には種々雑多の分子の含有してあるのは當然である、これ此教の廣大無邊である證據である、それを了簡の小さい人間の力でコセく證義するのは如何にも分を辨へぬ次第である、大調和大一致大活動は神秘と靈妙と不思議の中にあると云ふ

ことを知らずに小衝突を云々するは造化の精妙を知らぬからである。「人は神性と動物性を有す」と云ふこととや、「神は靈なり誠實なり」と云ふこととや、「信仰の基は眞實なり」と云ふことをよく味ふて見るがよい。先哲の所謂「我に不動点を與へよ余は世界を動すべし」と信條は我らの良友であるのである。

第十 章

天理教の神様は意味のない神様であること云ふ人がある、天理教の眞理は牽強附會の眞理であること云ふ人がある、是らはそもく正定と假定とを取違へた處から生ずる大なる誤りである、世人の今稱ふる處の眞理は多く假定

の眞理であつて其の神様は人作の神様である、其れを天然自然の自由用力の大自然大神様に比らべては丸で大小の差がこれぬ、かゝる大小輕重を辯ぜぬ様でなまなかに神様の領分を言論しよふとは如何にも大膽不遜なことである。

狭き意味の眞道者流は記紀二典を本據としてものを云ふけれどもソレは廣い意味の宗教を知らぬ人々の云ふことで取るに足りない、佛敎者流の或る自然派や、クリスト敎者の或る天然派の人々の見識は却つて宗教の本義を辯へることの多いのに愛國くこ八釜しく云ふ狹隘日本主義の人々の没道理はあまりに氣の毒である。

「自然は眞實なる慈母にして疑を抱ける小供には何も給せず」と云ふ古金句がある。

「神は精神なれば拜するものも又た精神と眞實とを以て拜すべきまなり」と云ふ至言がある。

「神は無限の愛なり人の神に對する君臣の分にあらずして母子の關係の如し」と云ふ信條がある。

「魚の水中にある如く人は神の愛の中にあり」と云ふことがある。

「罪によつてはらまれ罪の中に生成せし人が自己の力にて罪を脱せんとするは水が水源より高く上らんとするに同じ不能のことなり」と云ふ戒がある。

「汝の心の車を天の星につなげ」と云ふことがある。
 「此の疲れはてたる世の安からざるは神を求むる無聲の叫びなり」と云ふことがある。
 「人類は暗夜に叫ぶ赤子の如く神よ〜とさけびつゝ光のよさにさまよへり」と云ふことがある。
 是らは皆を我らの心を修むる料として居るこれらの意味を静々味ふて微笑するの力がなふては我らの神様の意味は分るものでない。

第十一章

天理教を迷信と云ふ人がある迷信とはそも〜如何なものであるか。

理に協ふたる信仰が本當の信仰で理に外れたる信仰が迷信と云ふのであるか。
 此の理と云ふものは人の作つた理を云ふか天の心の理を云ふか。

世間の人は手前勝手な理を理と指すけれど、我らはそのやふなものもを理とは思はぬ理は神様の御心であること信ずる。

神様の御心とは何であるか、眞善美である、いつくしみや、なさげや、まことや、これら神様の御心である此の御心に協ふたることならば、皆な理であると思ふ。然らば御教祖の偉大なる靈力を以て教へ下された教理

を奉じ守り行ひ道を歩むのが我らの天分である。
我らと云ふても總ての科學の要領は知つて居る、哲學の要領は辯へて居る、けれどもそれは皆を人間心である、人間自力ではとても最後の決定をすることが出来ぬ。

「藥品の効用はその病理學上の作用の知らるる前にあるが如く教祖の教靈力はその理を十分に解せざる前に著明なり」この訓言がある味ふて見るがよい。

「神は何が故に信するにあらず、我全性が應適するに より信するなり之れ自然經驗の證明する所なり」この誠語がある如何に奥床しいことではないか。

「善は神なり」と云ふことがある。

「神代人は赤子の如く神にすびれり」この遺文がある。

「人は信仰によつて義とせらるるものなり儀式にあらず血肉にあらず位にあらず學にあらず、誠によつて義とせらるるなり」この大賢の言がある。

これらのことをよく思ふて信仰のことを云ふがよい迷信正信をとのことは普通の道理で分るものでない。

第十二章

日本の古典學の解釋は、マシカに一つの善事である、併し乍ら世に云ふ神典は果して宗教の本義を資するも

のがあるかないか、これは一つの問題である。
 在來の日本の造化説、創世説は宗教の本義となる資質があるかないか、これは一つの問題である。
 我らは宗教上大神様を信仰するときは大神様の御心以外に何も省みることがないのである。
 されば在來の國學者の古事記の解釋や日本紀の釋義などは何も考慮にかくるに及ばぬ、實にかくの如き記紀二典は我らの信ずる宗教と立脚地を異にするものである。
 「我教の信仰は智能上の準許にあらずして心靈上の應諾なり」この大聖の玉音は我々の信條の一つである。

「人類が生きる水の源なる神をすて壊れたる水溜なる己に憑り頼むは靈の死なり」このことは我らの良き参心材である。

「信仰によらずして人の助かるべき理由なし」このことはタンカに道の基であると思ふ
 「神は人にあり格別に登しき人にあり」この聖書の句は如何にも奥床しいではないか枯化したる古典を以て人を救ふ礎をならふことは思はぬ、眞の救世力は意外の處にあるであらふ。

第十三章

罪は如何なるものであるか、病は如何なるものである

か、是に付て十分な解釋の出來ぬ宗教は宗教の本質がないのである。

云ふ迄もなく罪は心の病であつて身上の罪が即ち病である、病は迷より來り、迷は慾より來るものである。

御筆先の第二冊目に(なににても病いたみは更になし神のせきこみ手引なるぞや) (此の世に病ご云ふてないはとに身内さわり皆しやんせよ) 第三冊目に(何にても病ご云ふて更になし心違の道があるから) 又(思案せよ病ご云ふて更になし神の道をしへ意見なるぞや) 第四冊目に(ごのやふな痛み悩みもできものや熱も下りも皆なほこりやで) 第五冊目に(これからは如何なる六ヶ敷病で

も心次第になをらんでなし) 又(身の内なやむことをは思案して神にもたれる心思案せ) 第六冊目に(今までは病といへば醫者藥皆な心配したるなれとも) 又(これからは痛みなやみもできものもいま手躍りもみなたすけする) 又(どのやふな六ヶ敷病でも眞實ならばいきてたすける) 又第九冊目に(此度はごんな六ヶ敷病でも請合ふてたすけ家傳教へる) 又云ふことがある、これみな病の根治をさとしたものであるふ、罪のざんけの即ち神様の御ひさもごに近よるの力であることをごかれたものであるふ、我らは近代科學の智識を以て全く病の根本を調べ且つ治むることの出來ないものと思ふ、されば神秘

の靈光れいこうによるのは至當しちやうの事と思ふ。

「心さへ神にかなはゞ盲者もうしやは見、跛者はつしやは歩み癩病人らいびやうじんは潔まり聾者もうしやは聞き死たるものは復活ふくかつし貧者は福音ふくいんをまきく」ご大聖たいせいは云ふ我らは大奇蹟たいきせきご大功德たいこんとくご大慈悲たいじひご大なる教祖きやうそのすべて一致いちじしたのを認めかためてゐる。

「教祖きやうそは人類じんるいのためにくるしみ玉たまふのみならず神かみのためにもくるしみ玉たまふものなり」この幽秘ゆうひは信仰しんぎやうの實行じやうぎやうなくしては分るまい。

「万物ばんぶつは順序じゆんじゆなり規律きぎふなり和合わがふなり神かみは之これを主なつかごり玉ふご云ふ」ことを辨わふは大事だいじのここである。

「人は神かみをはなれて靈たまは肉にくと別わかる、靈たまと肉にくと別わかるゝは

造物主ぞうぶつしゆに背そむきたるなりソノ暗くらに迷まよふ元もとよりの分ぶんなり」ご云ふごごがあるこれを感味かんみするのは我らの平生へいせいの心得こころえである。

第十四章

日本國民にっぽんじんの本來ほんらいの性分せいぶんは全体ぜんたい陽氣やうきである、されば日本の宗教しゆきやうの陽氣やうきであるべきは至當しちやうのここである、陽氣やうきは即ち天あまの理ことわりを仰あやぎ頂たかく元氣げんきであるのである。

佛教ぶつぎやうは一体いつたいに陰氣いんきな宗教しゆきやうである故ゆゑにすべての國民こくみんすべての民族みんぞくを陰氣いんきに化くわした陰氣いんきは進歩しんぷご發達はつたつごの防害物ぼうがいぶつである。

在來ざらい日本にっぽんに行いはれた佛教ぶつぎやうの中でも日蓮宗にっれんしゆの如ごときものは

決して陰氣なものでない、成るべく日本の入氣國情に協ふ様に陽氣に出来てある、これ教祖日蓮上人の非常の苦心の功によるものである、日蓮宗は佛教中一番陽氣なものである故に佛教の中尤も生命の長いものである。

我天理教の根本實義と儀式とを知らずして、彼是枝葉を批難するのは如何にもつまらぬことである。天理教の儀式は天真にして莊嚴、陽氣にしてウブである、根本實義は樂天である、樂天であるけれどもユニテリアン教やユニバーサリスト教の如く神様の刑罰を知らぬものでない、贖罪を辨へぬものでない

「眞の善人は己れの事のみ省みず人の事をも省みるの
人なり己の利を求めざるに共に天より賜ひし賜ものを
忽界にせさるの人なり」このことは我らの教訓の如く
思ふ。

「奇跡の如くにして自然なり異例なるが如くにして普
通なり驚くべくして當然のものなり」どの達觀の位ま
です、まば我教の真相の分るであるふ。

第十五章

天理教會にてはモルヒネを云々、御水を云々云ふもの
のがある、これは頗る事實を知らぬ申分で答へるまで
もない、或は金米糖が何ごかをびやほふ、それが何ごか云

ふものがあるこれらは事實の真相をきはめず且つ事理を辨へぬものゝ云ふ言である。

今更云ふまでもなく神様に供へたものを信者の頂戴して感謝するのはすべての宗教の例である、我天理教が金米糖を供物とし而して御下りを信者の難有く頂戴するのは敬虔心の自然發露である他に理由は無い、敬虔心の偉大なるものが人の心靈を救ふのはこれ常のことである、

「ごんげ」「祈禱」「供物頂戴」の如きは宗教必須の大信條である、供物の品類の如何の如きは彼是問ふべき問題でない御筆先の第八冊目に(たいたいへやごしこむの

も月日あり、生れだすのも月日せわとり)

第七冊目に(是れからは産や助けもしつかりご切をみなしにはやくりまする)第八冊目に(まだ助け産や自由用何ときなりご延しなりごはやめなりごも)ごあるが如き立派な教理教訓に向つて感謝しつゝ供物を頂戴するのは實に至當のことである。

生理學にても心身相關の理を知るものはこのことについて批難することはあるまい、衛生にても心の衛生と身上の衛生とを知るものはかゝることに向つて兎角云ふまい宗教上の冥加力を知らずに淺薄な論難は迷惑の至りである。

「安心は信仰の賞與として神の賜ふ處のものなり」このことは如何にも難有いではないか。

「罪の念は神に對する人の借財なり」このこと味ふて見よ。

「神學の中心は人の心なり」このことをよく熟思するがよい。

第十六章

教會とは如何なるものであるか、如何にあるべきものであるか云ふことは分り易いことである、教會は即ち神様の御屋敷である、神様の御心を四方に布き傳へる處である、神様の命令に従ふて人を助け救ふ處である、

その助け救ふの方法は教理根本實義によるより外はない。

我天理教會の教會は今日迄日本に類のない教會である、國家の上からは不得止さきの法律に司配されているけれども教會の精神は世界を自由自在に助け救ふ大覺悟を有するものである、今日迄日本にあつたやふな生命のない祈禱禁厭を行ふやふな處さは分の違ふたものである、佛教の御寺のやふな役に立たぬ死んだ説教をする處さは全く相違したものである、耶穌教のやふなウソの神人造の神の前に偽善行爲をするやふなものとは實に相違したものである。

上は御本部より下は布教所出張所に至る迄天人合一の
 靈所である、信行合一の鏡屋敷である。
 祈禱は何れの宗教でも、その根本義の一である通り我
 教は御願を重んずる御さづけを重んずる御つこめを重
 んずる皆なこれ信神悟道安心立命の根本義である、ソ
 ノ根本義實行の場所が教會である教會は天理の光を四
 方に布き傳へる靈地である。
 神様の靈權を知らず、道德の妙用を知らず、法律の範
 圍を知らず三百代言的に我教會を云々するものは實に
 取るにも足らぬ不便なものである。
 教會の教師の品格をいへば

憂ふるに似たれども常に喜び負しきに似たれども多く
 の人を富まし何も有ざるに似たれども凡てのものを有
 たり」この風度がある如何にも奥床しいかぎりである。
 聖歌に

「神昔は多くの區別をなし多くの方法を以て、預言者
 により列祖に告ゆ玉ひし、斯の末日には其の子に詫て
 我ら人類に救の理を告ゆ玉へり神はその御子を以て万
 づの司となし玉へり、その御子にすべての光を負はせ
 玉へり」こある我らはこれを守て無限の感慨にうたれ
 我が大神様を祈ることいよく切なのである。

第十七章

我教會の祈禱御さづけ御つとめ等について云々するものは宗教と云ふものを知らぬものである、試に佛教の八宗九宗を見よ、耶蘇教の新舊各派を見よソノ他世界に於ける多くの宗教の有様を見よ皆を夫々俗眼より見れば奇々怪々のものである、我が教は尤も自然を尊び、天然を尊び、天理を尊ぶものなるべく人間の天性に従ふものであるのであるよく沈思すべきことである、「神と天使と人とは靈界くみ立ての機關なり此の機關幽にして秘なり」と云ふことがある我らはこれについて静かに慮りつゝあるのである。

「罪は苦痛によつて消滅するものなり、教會のよきで

に従ふて苦痛を去れよ」この誠がある我らはこれをおもふ。

「聖哀」と云ふ二字は我らの尤も重んずべきものである我らの教會の行動はいろくさまとあれと悉く此の二字の意味より流れ出るのである。

第十八章

教會の内部組織上、本席飯降伊藏殿のことについて彼是云ふものがある、か様なことにについて論議するは無益である何となれば宗教上の第一聖者は元より卓獨超越者であるから普通の理論に適用すべきものでない若しこれについて彼是云ふならば世界文明宗と云はるゝ

大耶蘇教の本領は一日も立たぬ。

且つや本席その御方の人間としての品風性行に一点の汚醜もないことは万人の認むる處、我らは唯信ずる御神樂歌に(一)に大工のうかゞひに何かのこともまかせをく我らは之を奉り頂くより外はない形而下のことは元より我らの眼中にない。

「博愛捨身はこれ宗教家の本分なり」このことを本席殿の守らるゝこと何十年實に天使の体である。

「哲理に動かさるゝものは信仰にあらず」この理を根本的に冥々裡に人心の奥堂に築くは我教の本分」ご云ふこと我らはわすれぬ故に第一聖者の旨を命とする。

「三度び神の慈悲を説いて一度び神の嚴をこくを怠るなかれ」この賢者の教訓を守る我黨は第一聖者に隨喜するの事福を日夜感謝するものである。

第十九章

天を畏れよ人を敬へよ自然に還れよごは我天理教の本義の一である。

世間には議論をなして云ふものがある「宇宙間に神ありごするもみだりに吉凶禍福をこくものならず云々」眞正の神は公平無私であるけれども天理教の神は非理迷道をこくものである「神はみだりに示威的のこを發するものでない天理教の神は人を威赫す云々」

これらは一も當を得ぬことである、云ふ迄もなく、神様は全智全能のものである、圓滿靈妙のものである、人間の力では計り知られぬものである、吉凶禍福は元よりスメテの事物を御司配なさるものなれば如何なることをもなさるるのである、神様が大公大平あることは元よりである、神の示威云々は誤解である。宗教の根本義に尤も重んずべきものは、神様の刑罰である、人間の贖罪であるこの二大事件を知らずに天理教の本義を云々するはソノ分際を知らぬことである。ユニテリアン及びユニバーリストの如く神の慈悲ばかりごく宗教は完全なものでないことは誰も知る。

宗教を了得するには第六感の作用が必要である。「宗教家は徳によつて立つ帝王の帝王なり」このことを我らは決定としてゐるものである、我らの據る處は聖露である。

第二十章

宗教には理以上の理の力がある、道以上の道の力がある、これは學問や論理では分らぬ、極粹の理絶頂の道を知らふと思へば我が涙の力によるの外はない、信仰の力によるの外はない。御筆先第六冊目此の世界山ぐになぞも雷も地震大風水のりつづく第八冊目に雷も地震大風水つきも是は月日

のざんねんりつぶく第十五冊目に親の目にざんねんのも
 ものは何時に夢見たよふに散るや知れんで第十六冊目
 (今まではどのよふなことも見ゆるしてじいとしていた
 ことであれども)又今日の日はもふ日がつんであるから
 なごんなことでもすぐにかやすで)又けふの日の神のざ
 んねん立ぶくはよふいなることでないと思へよ)又けふ
 からは月日でかける働きはごんなことをばするやしれ
 んで)又第十七冊目(これからは月日ざんねん出だならば
 とのやうなことがあつたやしれんで)けふの日はどのよふ
 なこともつんできた神のざんねんはらすみていよ)この
 よふなことがありてもうらみなよみなめい〜にじて

をいたの)やなと申す御旨がござります是らのことを指
 して天理教の神様は偏狭不仁なと申す人もあります、
 けれども此の御ふでさまの深い意味はどこにあるか容
 易に分るものでなく、よしや分るにした處で、神様の
 公憤と聖怒は決而不思議でない、有神教の立派なもの
 へ經文を見るるよいこれらの文字はみち〜てあるの
 を、すぐに發見するであらふ「教の聖殿に於て靈なる
 神に接せんと欲するものは、先づ心情の經驗よりせざ
 るべからず」このことは信仰に付てのよい戒箴である
 と思ふ。

「人は万有の小供なり」この哲言をよく味ふて、
 幽秘

に心を注いで見るがよい。

「説教は人の製造し得べきものならず、教祖の書は文法的に解剖すべきものにあらず」この古大賢の遺訓は今も尚ほ服心すべきものと信ずる。

第二十一章

信仰で堅まつた人は浮世の人のやふに花やかな軽い薄い弱いたましいの人でない、世間並の人と云ふものは定見がなく覺悟がない、けれども天理教の信徒は非常の決心、無上の安心を有するものである、俗界より見て變に見ゆるのは至當である。

御かぐら歌人に笑はれ誹られて珍し助けをするほごに

又人が何事云ふことも神が見て居る氣をしづめとある御言を指して信徒の平氣を笑ふものがある、けれどもソレハ甚だ間違ふ次第である。

そもく宗教に依つて得た信仰心と云ふものは水にをぼれず火にやけず刃にきれず世に動かされず万古不移の大覺悟である世間の人は目前の慾にソノ業を營なめども信仰者は永き行末を見定めて居る世間の人は手前勝手に迷へども信仰者は神様の命令に従ふて悟つて居る、世間の人は此の世の本も後の世のさまも我身の運命も知らずにはかなく淺間しくくらし居るけれども、信仰者は天の光を身にしめて盡きぬ命を抱いて居る。

世間の人は樂しみを希ふて苦しみの淵に沈んで居るけれども信仰者は苦しみを喜んで樂しみの園生にながらへて居る。

ア、これはと相去ることこの遠いのを知らず迷の目で人を見迷の口で人をあざけるのは如何にも憐れな次第である。

「完き人を作らんと欲せば先づ人を完からざらしむる罪をのぞかざるべからず」「天の神自から下り世を救ふにあらざれば此の世は決而救はれざるなり」とある聖言は我らの日日の良友である。

一言にして云へば天理教の信仰者は謙の宗教を會得し

實行する人人である。

「神に向つてその存在の證を與へよと云へば我は我なりと答へ玉ふ外はあらじ」この大聖の言を守るものは我等である。

第二十二章

天理教は實行の宗教である、天理の教の信仰者は「知るこ雖も知らず知らずこ雖も知る」と云ふ、奥深い道を、おきまへてゐる人である、信行合一は天理教の本領である、人間感性の精理性の粹を身にそなへて天地の妙を身に占むるものは天理教の本質である、天理教の信徒は日本全國で三百二十万ばかりある教道

職は三万余人ある、教會は一千七百會ある、これら悉く天理の大道を信じ且つ行ふものである、尤も多人數の中まれには信仰心の倒れたのもあるけれども、ソレは極々少數のものである。

天理教徒は一体に金品を濫費するご云ふ人があるけれども、決してソレナことは無い「なにかよるづのたすけあい」と云ふ御教祖の博愛の御旨に従ふて皆々信仰心の慈善心のつよい故に我家産を傾けて人を助くる、ソレ故いろくのこを云るゝけれども、ソレは眞の義人知らぬ世のあやまりである。

又た天理教徒は醫術を遠ざけて非命に死す云々のこと

を云ふ人があるけれども決してソレナことは無い、それは罪のざんげの祈禱の念の強いために知らずく皮相生理術をうこんずるのであつて決してごむむべきことでない。

「宗教は慈善なり慈善は宗教の花なり實なり」この賢者の言がある我らは之にそむくものでない。

クエーカー宗のをきてに「教師は俸給を受くべからずご云ふ文がある我らはこれと是とするものである

第二十三章

天理教は國家及社會の毒害物であるご云ふ人がある、天理教は遊民をつくり、殖産の道を妨げ愛國心を退く

るものであると稱ふる者がある、これらは毫も、もの
、道理を知らぬ人の言である。

天理教の教理、根本實義、布教の方法は決して國家社
會個人に仇するものでない信仰者を遊民とすれば何の
宗教も皆な遊民製造所である、愛國心を退くるごは思
ひもよらぬこと、我教は世界的博愛をこき人類同情を
こき、四海兄弟をこき、助け一條を守るけれども、國
家に害するものではない、我教は人も世も國も助け救
ふの決心を有するものである、餘所の宗教のやふに國
家や政府の厄介になり、外國傳道會社の厄介になるや
ふな薄弱なものでない、我が御教祖は「せかい一れつ」

この玉へごも又た「むらかたはやくたすけたい」と仰
せらるゝ我らは、日夜これを奉ずるもの、愛國愛民愛
理は我らの本分である。

「完からんことを欲はゞ往て汝の所有を賣りて貧者に
施せ、然らば天に財あらん」と云ふ大聖の金聲は我ら
の是とする處である。

「己れの心をよく治むるものは敵の城を攻取るものに
まさる」と云ふ大賢者の遺言は我らの守る處、我らは
己れを通じて國に及ぼし國を通じて世界に及ぼすもの
である順序、正義、平和、進歩は我らの旗印である。

第二十四章

教育は宗教と調和の出来ぬものであるか信仰は智識と
 両立せぬものであるか、これは一の大問題である。
 或る哲人は、二者遂に一致するに云ひ、或聖人は二者
 最后是調和の海に入るに云ふ、一致に云ひ調和と云ふ
 皆な神秘の妙用である靈力の働用である。
 天理教の教師は學問がないによつて迷信に益々進むに
 云ふ人があるが、これは一應理のやふであつて決而理
 でない、何となれば宗教は理性に訴ふるより感性に訴
 ふるものである、宗教は智的より情的である、推論よ
 り直覺である、されば學問の必要はあまり認めない、

殊に明治の今の世の中のやふな雑駁、淺薄な教育は尙
 更入用がないと思ふ

昔から大宗教家は多く貧賤の身より出たものが多い。

神學校出の人に大宗教家は殆んどない、マトヘバ、エ
 リヤの如きダニエルの如きアモスの如き皆な、ソノ例
 である第十九世紀の大宗教のムーデーは賤い乾物屋の
 番頭ではないか。

無學は幸福である、と云ふことは一の眞理である、古
 來、あはれむべき厭世人は多く有識の人である、ドイ
 ツ人の自殺の數を計るに學者千人中自殺者六十人下
 女千人中自殺者四人とは面白い證據ではないか。

尤も恐るべき異端を主張し最も憎むべき懷疑をとなふるものは多く有識者で此學の農夫や職工はさる例がない我らは天民の二字に重を置く。

第二十五章

人間の音聲、言語、文字、思想、事實等のことをしらべて、宗教の或る方面の料にするは決して此要のことではない、けれども、これは、根本問題でなくして寧ろ枝葉の問題である、殊に日本のやふを、言語文字思想の流れの雜駁な國に於てはソノ事容易すなく頗る誤りが多い、かゝることを輕々にのべて宗教の本領に及ぼすは不當である。

殊に天理教は前代未聞の千古未嘗有の宗教であればソノ音すべて天音である、ソノ語、すべて天語である神意悠遠殆んど、解すべからざるものにみだりに説明するのは不遜の次第である
御ふで先第十一冊目に（この世をはじめだしたるやしきなら人間はじめ元のをやなり）第十二冊目に（その中に中山氏と云ふ屋敷日本はじめ道具みへるで）さある御言をさして彼是云ふ人もあるけれども、これは信條の範圍に屬するここで智識の領分のものでない、殊に又御教祖の文字はみなカナで音も土音なれば何の御心やらこれを察するにはよほどの思慮を要する事斯る

大事を何ともなげに云々するのは宗教上の事に關するもの、謹まねばならぬことである。

「神學の中心は心なり」この古哲言がある。「心靈以外のものにして直接に知認し得るものは神のみ」このことばがある、是らは大に味ふべきことと信ずる。

第二十六章

宗教は國家に利用せらるゝと、その本分とするものではない、宗教は社會に利用せらるゝを、その本分とするものでない、宗教は絶体の力であつて神聖の体である元より宗教が、その國家及社會と順和なるべきは、宗教そのもの、性質の天分のある處である、けれども

ソレを以て直に宗教は國家の道具、社會の道具であること云ふ譯には行かぬ。

要するに宗教は人を助け、世を救ひ國を救ふ、天來の聖体である。

我天理教はすべての宗教の元理元則を包含し、すべての道德の規律條目を含有し、總ての人、總ての國すべての社會を助け救ふ處の根本的實義を有する處のものである、佛教云ひ、耶蘇教云ひ、儒教云ひ、ソノ他いろいろの在來の宗教は局部的趣風を備ふることの多いけれども、天理教は大世界的體度を具ふる處の宗教である。

我ら今謹んでソノ根本實義の大要を世に示さふ

一 大世界の起源を説いて人に初發心を與ふ。

二 人類の起源を説いて人に悟道心を與ふ

三 人類の運命を説いて人に信神心を與ふ

四 心の病めるものを教へて切に神に頼らしむ

五 身の病めるものを諭して切に神に頼らしむ

嗚呼實にこれ絶大、極幽、深奥、無限の福音でなふて

何であるぞ、これを信ずるものは罪より救はるゝので

ある、我天理の大神を祈るものは美はしき神の子となり得るのである。

ア、宗教は事實である經驗である、宗教は議論でない
空想でない世の人よ、宗教を信ぜよ、大神を信ぜよ、信の
一字は宗教死活の分るゝ處である、古への大聖人云ふ
た

「人は神を信じて救はるゝのみならず亦信ぜしめられ
て救はるゝものなり」とこれ誠に万古不動の妙語で
ある

我は今、根本實義の解釋をせぬ、これ我が理論の力の
乏ほしいのを憂ふるのでない、我が信仰の精の弱いの
を恐しいからである、ア、世の人よ、信ずるものは我
れに來れ、共にく楽しんで祈らふ、信ぜざる人よ我れ

に來れ、我は力を極めて御身に語らふ、我は今、謹んで筆を擱く、これ我宗教の神聖を汚すを畏るしからである

(まこと一つが天の理)

天の理ならすぐに受取る

すぐにかへすが天の理)

(善にも悪あり

悪にも善あり

まこと一つが天の理)

天理教根本實義 (終了)

◎此の書の著者は天理の道のために左の五書を作りたり

◎天理教の本領

再版出来

◎天の光

再版出来

◎天理教道話

再版出来

◎御かぐら歌解辨

再版出来

◎天理教御教祖御一代記

再版出来

一 は哲學科學宗教學及社會國家上より天理教の本質を論定したるものなり
二 は世界各州及び日本の情勢人間の運命等より天理教の位置を説明したるものなり
三 は誠(まこと)の一字を百面千方より解説し歸納したるものなり

四 は天理教の神典を信者の身として隨喜敬仰したるものなり
五 は大聖教中山みき子の生涯を讚美し謠歌したるものなり
以上慎で大方の清土に捧ぐ希くは著者の微衷を察し玉はんことをア、不孝兒の涙と血と骨とは捧げて此らの文中にあり

明治三十三年九月二十日印刷
全 年十月三十日發行

正價拾五錢



滋賀縣蒲生郡山中村二十一番地

著 者 山中重太郎

奈良縣山邊郡丹波市町字三島五番地

發 行 者 木下松太郎

大阪市南區繩谷西之丁十七番屋敷

印 刷 者 岩井龜次郎

發賣元

大和國山邊郡丹波市町
字三島天理教會門前

木下書店

